

美術専攻 洋画研究領域

LIU Zhixuan

リュウ チセン



守霊

色鉛筆、水彩絵具、絹、木片

守霊

私の制作は一貫して「脆弱性」という概念を軸に展開してきた。ここでいう脆弱性とは、破壊や欠如、無力さを指すものではなく、他者や環境との関係のなかで生成され、つながりや再生の可能性を内包する状態として捉えられるものである。本制作「守霊」は、そのような脆弱性のあり方を、具体的な空間経験として立ち上げる試みである。

本作品は、インスタレーション形式による総合的な制作であり、蛾、幡状の吊り下げ要素、半透明素材、身体を想起させる形態、霊堂を思わせる空間構成を組み合わせることで、生と死のあいだを往還する経験の場を構成している。

本作は具体的な葬儀の情景を再現するものではなく、儀式性と「留まること」を内包した空間を立ち上げることで、死を瞬時に終結する出来事としてではなく、停滞と反復のなかで持続的に感知される状態として捉え直すことを試みている。そのなかで、生命はいまだ流動し続けるものとして立ち現れ、生と死は明確に分断された二項としてではなく、連続的な状態として経験される。

制作動機は、今年相次いで祖父母を亡くした経験に端を発している。私は初めて長時間にわたって守霊に立ち会い、身近な存在の死を身体的に経験した。その過程において、多くの蛾が霊堂に現れる光景に遭遇した。極度に静まり返り、緩やかに流れる時間のなかで、蛾の存在は私の意識のなかで強く印象づけられた。それは死の場に属しながらも、生きた生命として飛び続ける存在であり、生と死の境界を曖昧にするものであった。

こうした経験をもとに、私は生と死のあいだにある感覚を、鑑賞者が実際に入り込み、滞留することのできる空間としていかに可視化できるかを考えるようになった。

「守霊」において私は、守霊の場で体験した個人的な感覚を、鑑賞者が入り込み、留まることのできる空間的構造へと転換することを試みた。本作品において脆弱性は主題として明示されるのではなく、停滞と反復のなかで感知され続ける状態として、作品全体の構造に留め置かれている。